



## 近江の古瓦 XIV 補遺2(湖東)

「近江の古瓦 XIV」は彦根市以南の琵琶湖東岸地域の出土瓦のうち、「文化財教室シリーズ33」、「64」以後に発見されたものについて紹介しますが、その前に坂田郡山東町本郷出土の古瓦について触れておきましょう。これは米原町枝折の三大寺跡出土瓦と全く同じです。一は山田寺式とよばれる重圏文縁をもつ単弁8葉の軒丸瓦と四重弧文の軒平瓦の組合わせです。他は藤原宮式とよばれているもので、軒丸瓦は複弁8葉の内区を密な珠文帯がめぐり、外縁には鋸歯文が施されています。これに対する軒平瓦の内区は偏行唐草文で、上外区珠文帯、下外区鋸歯文帯のものです。ただし両方とも軒丸瓦は小破片しか発見されていませんので、ここでは両方の軒平瓦だけを示すことにします(1、2)。なお、山東町では大鹿でも古瓦片が出土しています。

さて、さきに「文化財教室シリーズ33」で彦根市正法寺出土の軒丸瓦について述べましたが、先年同地で軒平瓦が発見されました。四重弧文のものです(3)。どうもこの地の遺跡は瓦窯跡のようです。

犬上郡甲良町長寺の圃場整備事業に伴う調査で、ごく最近数個の軒先瓦が出土しました。軒丸瓦は近江式とよばれるもので、中房部分は剥落が大きくて不明ですが、それを取りまいて珠文帯があり、単弁8葉で、稜線が子葉を貫いて弁端に達しています。外区には中房の周囲のものとよく似た小粒の珠文が密にめぐっています(4)。これに対し軒平瓦は簡単な幾何学的文様で、その単位文様が連続するものと(5)、小間隔をおいて繰り返されるもの(6)があります。

愛知郡秦荘町目加田については、「文化財教室シリーズ33」で調査がはじまったことを述べましたが、その後の圃場整備事業で出土した軒先瓦には、軒丸瓦が1種類と軒平瓦が2種類あります。軒丸瓦は小破片のためはっきりしない点もありますが、これも近江式とよばれる単弁系のもののようです(7)。軒平瓦は、普通の重弧文のものと(8)、「文化財教室シリーズ33」に示した『愛知郡志』所載のものに似ていますが細部に相違のあるもので、瓦当面に斜線をX状に入れ下底面が波状に押圧されている重弧文のもの(9)があります。

八日市市では、建部日吉町の上日吉で変わった文様の軒平瓦が出土しています。瓦当面の文様は斜線で大きく三角形をえがき、下部に凹線を一本入れた簡単な文様です(10)。これは能登川町佐野でも出土しています。同じ建部日吉町にある吉住池から単弁系の軒丸瓦が出ています。この弁は三角形で、弁数は12と思われ、外縁には鋸歯文があり、蓮子は1+5のようですが、1個脱落していて、実際は1+6でしょう(11)。これは能登川町法堂寺跡出土の瓦と似ていますが、蓮子の数が異なります。また同所には四重弧文の軒平瓦があったらしく、顎の部分の下の二重弧分が出土しました(12)。報告書ではこの遺跡を寺院と見ず特殊な施設と見えています。

神崎郡能登川町佐野にある法堂寺跡では、前述の八日市市上日吉出土の三角文軒平瓦と同じものが発見されました(13)。同町猪子では小破片の軒丸瓦が2種類出土しました。一は単弁系の瓦で、弁は輪郭の線がとりまいた丸味を帯びた弁で、間弁が短くて弁の下部は

隣の弁とつながっています。弁数はおそらく8葉とされます。破片のため外縁や中房の部分は不明です(14)。他は複弁系の瓦で、これも8葉とされますが、外縁や中房の状態はすべて不明です(15)。なお注目すべきものとして、大津市南滋賀や穴太で出土する方形平瓦が小破片ですが此処で出土しました。このような方形瓦は草津市<sup>北天笠</sup>や守山市<sup>欲賀</sup>でも見られますが、いずれも小破片でしかも出土数が極端に少ないので、遺跡との関連を知ることが出来ないのは残念です(16)。<sup>鉢光寺</sup>では軒丸瓦が発見されましたが、この瓦当文様にはわかりにくいところがあります。あるいはこの地方にだけ見られる弁端が平たくなる単弁系のものかとも考えられますが、確言はできません(17)。

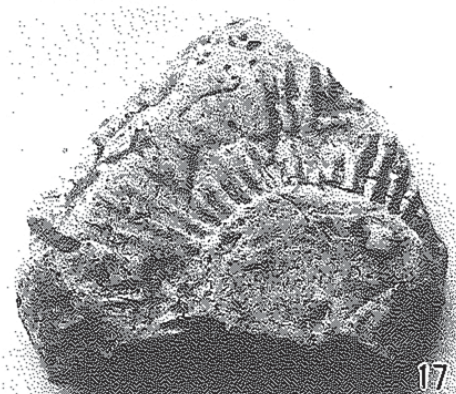
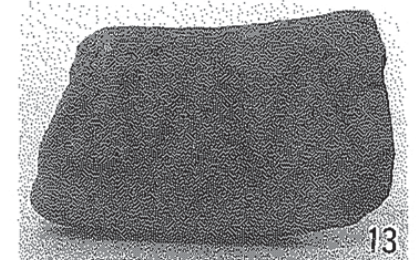
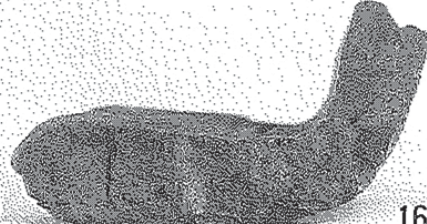
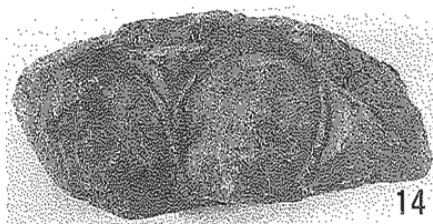
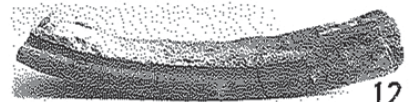
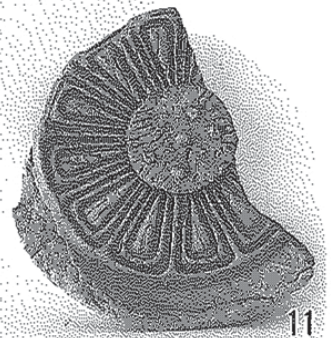
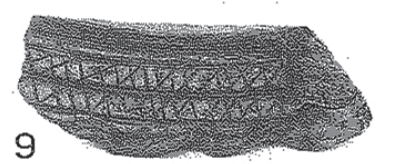
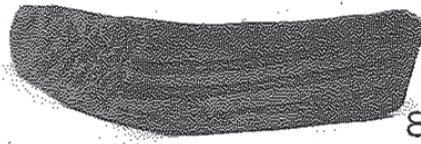
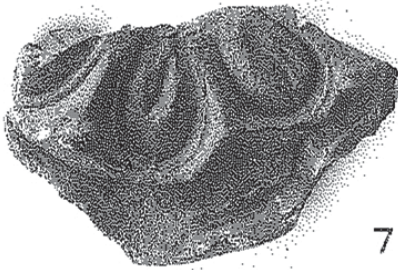
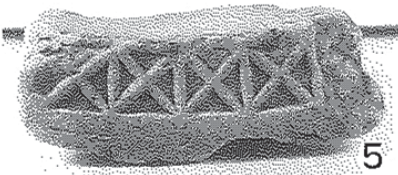
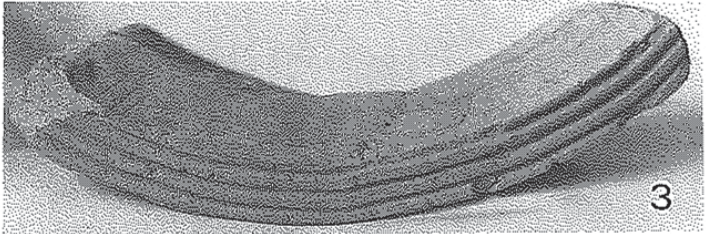
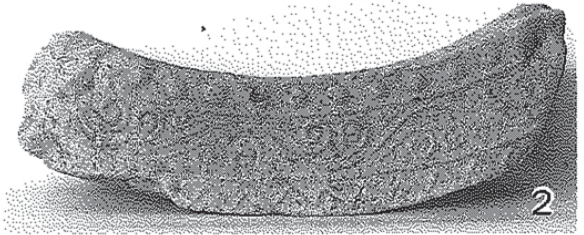
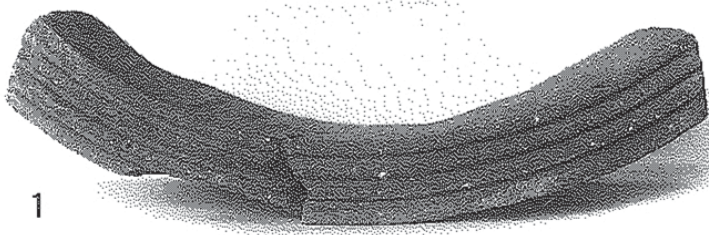
五個荘町<sup>釜堂</sup>は、その地名からも、『近江輿地志略』に寺院に関する伝説が述べられているところからも、寺院の存在が考えられていましたが、圃場整備事業に伴う調査で多くの種類の瓦が発見されました。軒丸瓦では、まず山田寺式の単弁8葉重圈文縁のものと思われる瓦の小破片があります(18)。しかし破片が小さいため詳細は不明です。また、前述の吉住池出土の単弁系のものによく似た、弁端が平たくなるものもあります(19)。これも中房や外縁部が欠けていて不明の点が多いものです。さらに、同じく小破片のための確には言えませんが、このあたりの他遺跡の例では能登川町法堂寺跡出土の複弁系のものに近いと思われるものが出土しています(20)。軒平瓦はすべて重弧文ですが、四重弧文のもの(21)三重弧文のもの(22)、いずれも重弧を作る溝が比較的細い線で作られています。さらに、此処にだけ見られるものに、重弧文の瓦当面に数条の凹線が縦に作られたものも出土しました(23)。

近江八幡市の<sup>千僧供</sup>では、圃場整備事業で2個の軒丸瓦が発見されました。一つは雷文縁軒丸瓦の縁部だけの破片です。(24)。此処で

雷文縁の瓦が出土したことは、蒲生町宮井廃寺の雷文縁のものとのような関係があるのかを考えるべきでしょう。千僧供では「文化財教室シリーズ64」で紹介したように、八日市市瓦屋寺付近の瓦窯出土瓦と関連があると思われるものが出土しており、どうも近くの土地で出土する瓦と関連せず、少し離れた処のものと同似のものが出るようです。さらに他に例を見ない平縁で素弁8葉の瓦が出土しました。蓮子は1+6で、弁はその断面が三角形で弁端は桜花状に切れ込みがあります。間弁は弁を細くしたような形です(25)。

「文化財教室シリーズ64」に蒲生郡蒲生町<sup>綺田</sup>出土古瓦として『蒲生郡志』所載の拓本を示しましたが、近年この種の瓦が出土しました。単弁系で、蓮子は1+6、外縁の斜めに立上る部分に鋸歯文があります。間弁は線で表現され、その先端が二つに開いています(26)。これと同じと思われる非常に小さな外縁部だけの破片が能登川町で発見されました。蒲生町石塔の石塔寺では素弁で平縁の軒丸瓦の破片を所蔵しています(27)が、『蒲生郡志』にはこれが綺田廃寺出土品として載せられています。石塔寺はもと綺田(実際は綺田に続く寺という集落のようですが)にあった寺院ですが、佐久良川の氾濫で石塔に移ったとの伝承もあり、これらの関係はもう少し調査する必要があるようです。なおこれは「文化財教室シリーズ64」で紹介した早崎氏所蔵の拓本のものとはやや異なるようです。また、これとよく似たものが彦根市岡部の屋中寺跡から出土していることを付け加えておきましょう。この屋中寺のものは蓮弁と外縁を区画する円圈が無く、蓮子は1+4です。さらに屋中寺のものの中には輻線文縁のものもあるようです。

以上湖東地方の最近の圃場整備事業などで出土した古瓦を中心に述べました。「近江の古瓦 XV」は大津を含む湖南出土の古瓦について述べることにします。(西田 弘氏 提供)



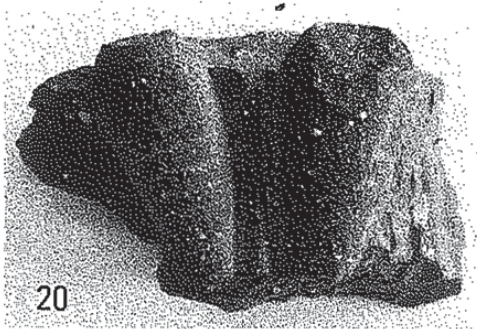
- 1. 2 本郷
- 3 正法寺
- 4. 5. 6 長寺
- 7. 8. 9 目加田
- 10 上日吉
- 11. 12 吉住池
- 13 法堂寺
- 14. 15. 16 猪子
- 17 鉢光寺



18



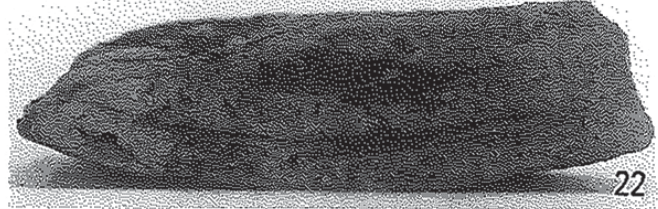
19



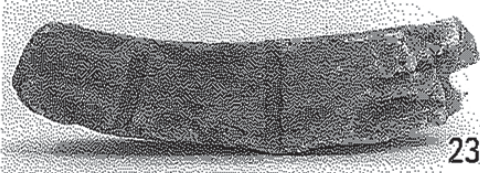
20



21



22



23



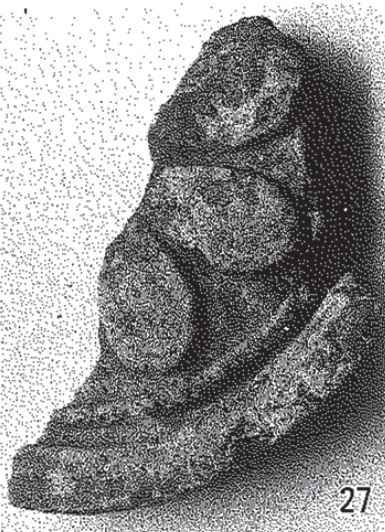
24



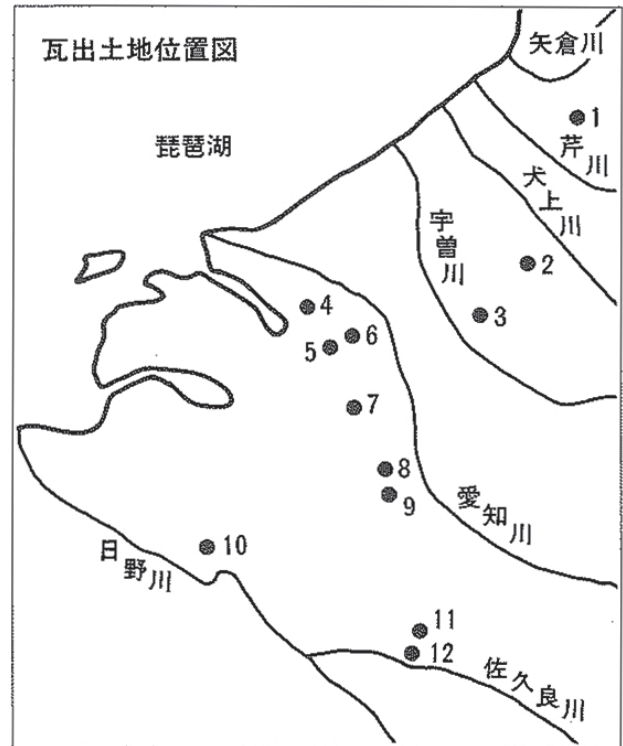
25



26



27



- 18~23 金堂  
 24. 25 千僧供  
 26 綺田  
 27 石塔寺

1. 正法寺 2. 長寺 3. 目加田  
 4. 鉢光寺 5. 猪子 6. 佐野法堂寺  
 7. 金堂 8. 吉住池 9. 上日吉  
 10. 千僧供 11. 石塔寺 12. 綺田(寺)